

照島てるしまのするどい気合いとともに、どちらからともなく、相手のそでぐちとえりをつかみあいました。

大きな照島が、四郎のからだをくずそうとして、右に左にひきまわし始めました。しかし、四郎はそれにさからいませぬ。力をぬいたかのように、相手の動きのまま移動いどうします。照島の足が、ときどき、四郎の足にとびますが、四郎は、その足をふわりどうかせて、また、もとの自然体しぜんたいにかえります。

離れては組み、追いつがっては、また、二人のからだは組みあいます。観衆かんしゅうは、じつと息をこらして、二人のかけひきをみつめています。

突然、いっしゅんのすきについて、照島の足が、四郎の足をはらったかと思ふと、照島は、四郎の小さなからだをかかえこむようにして、肩かたぐるまにかつぎあげました。

勝負あった、という観衆の声とともに、四郎のからだは空中に投げあげられ